

第4章は観測で得られたデータの処理方法について詳しく述べられている。デジタル時代にふさわしくデジタル技術を駆使したデータ処理の方法が、単に方法論的に述べられているのではなく、大気乱流のように、非常に広い周波数範囲にわたり、かつトレンドやノイズを含むデータ、また場合によっては平坦でない地形上で得られるデータについて、実際に即した解析方法が詳しく述べられており、データ処理を行う際に非常に参考となる。記述が少し簡単なきらいはあるが、掲載されている参考文献・参考書でこれを補うことが可能である。

20数年前に大気境界層の観測に第1歩を踏み出した評者としては、1つ1つの観測を行うことによって体験として境界層観測に関するノウハウを手探りで身につけたこと、またデジタル技術が余り利用できなかった当時、アナログ技術でデータ処理を行って苦労

したことなどを思いだし、大気境界層の観測技術がこのようにコンパクトにまとめられて教科書になるということに、時代の流れと技術の進歩を感じ、非常に感慨深いものである。

今後のWCRPの大きな柱となるGEWEXにおいては、複雑な地表面における境界層観測が研究の1つの中心的な課題となる。これから観測を行おうとする研究者のみならず、境界層に関心のある研究者に一読を薦めたい好著である。

本書では境界層の基礎的な部分は触れられていないが、これについては既に多くの専門書が出版されており、また同じ著者による大気境界層に関する専門書がOxford Univ. Pressからまもなく出版されると聞いており、これに期待したい。

(気象研究所 藤谷 徳之助)

春季大会スペシャルセッションのご案内

「極域の物質循環と気候システム」

(趣旨) 気象学・大気科学の世界で、極域の問題は避けて通れない重要な課題です。極域は、ある場合には「局域」として研究がなされてきましたが、また、globalな像を考えようとするとき、重要な要素であることが明らかになってきました。昨今話題の気候の変動から地球環境の問題においても極域は大変重要な役割を果たしているとのこと。こういう中で、気象学会でも多くの会員によって様々な分野で極域に関連した研究が行われており、この際、一堂に会してみたいとの提案です。南極・北極域、さらに高山域で様々な観測・研究計画が進められていますが、これまでの成果を踏まえ、今後の新しい方向性を見いだすことを念頭に研究発表をしていただきます。特に、南極域で

は、「ドーム計画」や「大気化学計画」に続く次期の計画を考える時期です。これまで極域研究そのものには関わってこれなかった方にも「グローバルな中での極域の役割」という立場で議論に加わっていただき、新しい発想、研究の構想が生まれれば幸いです。ふるって発表申込、参加をお願いします。

(呼びかけ人) 極域研究連絡会：

阿部彩子(東大気候システム研究センター)

岩坂泰信(名大太陽地球環境研)

安成哲三(筑波大地球科学系)

山崎孝治(気象研気候研究部)

山内 恭(国立極地研究所)